

ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：小山久美子

(記入日：2020年 9月 30日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2020年 前期>

- 「小学校英語指導法」(児童教育学科 2年 前期 必修科目 2単位)
- 「小学校英語」(児童教育学科 1年 前期 必修科目 2単位)
- 「言語学入門(1)」(国際英語学科 1~2年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英文法Ⅱ」(国際英語学科 2年 通年 選択必修科目 2単位)
- 「言語コミュニケーション特講Ⅳ」Ⅳ(国際英語学科 3~4年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英語科教育法Ⅰ」(国際英語学科 2年 前期 教職必修目 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が、小学校、中学校、高等学校で英語を指導できる知識と指導技術を身につけるためである。

学生が英語の構造を理解し、言語学全般についての基礎的知識、さらに専門的な意味論・語用論の知識を習得し、自分で見つけたテーマを探求し論文を書けるようにするためである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「小学校英語指導法」「小学校英語」「英語科教育法Ⅰ」では、オンライン授業のため、事前に資料をファイルに添付し、学生がダウンロードまたは印刷して、授業に臨めるようにした。授業内課題及び特別課題の提出、返却、次の授業でその説明をする等のフィードバックを行った。「小学校英語指導法」「英語科教育法Ⅰ」では、対面授業に移行してから学生が模擬授業をし、生徒役の履修生と意見交換、教員が講評した。

「言語学入門(1)」では、オンライン授業で授業内容の動画を視聴した後、双方向で補足説明、授業内課題及び特別課題の提出、コメントを付して返却した。

「英文法Ⅱ」「言語コミュニケーション特講Ⅳ」では、オンライン授業のため、事前に資料をファイルに添付し、学生がダウンロードまたは印刷しておき、それを授業内で説明、チャットで質問に答えてもらったり、wordファイルで授業内に提出してもらったものを画面共有してコメントするなどして進めた。授業内課題及び特別課題を提出、返却して、次の授業で説明する等のフィードバックを行った。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「小学校英語指導法」では、学習指導案を書き（エビデンス 4）、模擬授業を行うことができたが、各自が45分の授業を実施することはできなかった。また、模擬授業でクラスルーム・イングリッシュを十分に使えた学生が少なかった。この傾向は授業内課題にも現れていた（エビデンス 3）、丁寧に対応する必要があった。

「小学校英語」では、小学校英語の指導に必要な英語の基礎知識について説明したが、音声に関する指導時間が少なかった。全体として、文法が苦手であることが分かったので（エビデンス 3）、今後は説明に十分時間をかける必要がある。

「英語科教育法Ⅰ」では、8月に模擬授業を行うことができたが、各自が50分授業を実施することができなかった。導入・展開・まとめまでの流れができる時間を設ける必要がある。

「言語学入門(1)」では、参考資料としての録画による動画を見せることができなかった（エビデンス 1）ので、理解不足を懸念していたが、ほぼ理解できていた（エビデンス 1）。

「言語コミュニケーション特講Ⅳ」は、ディスカッションをしながら進める予定だったが、オンライン授業でそれができず不十分であった。

「英文法Ⅱ」では、練習問題は十分にできたが、説明にも時間をかける必要があった。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生の理解が十分に得られるように、授業での説明を丁寧にしていくことを心がける。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 2020年前期授業評価アンケート（非公開）
2. 自作動画（非公開）
3. 授業内課題、授業外課題（非公開）
4. 学習指導案（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

内海崎貴子

(記入日：2020年9月9日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

教職論(小)(1年次前期教職必修2単位)、教職論(中・高)(1年次前期教職必修2単位)、教育実習演習(事前・事後指導)(3～4年次教職必修1単位)、教育原理(1年次後期教職必修2単位)、道德教育の指導法(中・高)(3～4年次教職必修2単位)、生徒指導(中・高)(3～4年次教職必修2単位)、教職実践演習(4年次後期教職必修2単位)、女性学(共通教育選択必修科目2単位)、女性学(1)(共通教育選択科目2単位)、道德教育の理論と方法(大学院後期選択科目2単位)、道德教育実践演習(大学院前期選択科目2単位)、ジェンダー教育学(1)(大学院前期選択科目2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- 教育に関わる基礎的・基本的知識、および教員として必要な技能の習得
- ジェンダー・女性学の視点から、日常生活における様々な問題を発見し、それを解決しようとする態度や方略を身につけ、自身のライフサイクルを考えられるようにすること

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- インターネットを活用した情報収集の時間を設定し、オンラインによる情報共有、課題解決を図る(生徒指導)
- 参加体験型授業の実施(教職論)
- 事前課題の設定により、授業内での反転学習を実施(教職論)
- ワークシートを用いた学習内容の整理及び検証をグループにより実施(教育原理、教職実践演習)
- 模擬授業実施および「授業参観記録」を用いた討論設定(道德教育の指導法)
- ICTの活用、グループワーク、ワークショップ、ナプキン製作と吸収力の実験の実施(女性学、女性学(1))

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- ① 生徒指導では、学生全員がオンラインによるプレゼンテーションができた。
- ② 教職論、教育原理では、各回のワークシートをファイリングすることにより、学習内容の確認と省察が可能となった。

- ③ 道徳教育の指導法では、模擬授業実施後の討論を活用し、自身の学習指導案を再構築できた学生は3分の2にとどまったことから、課題が残った。
- ④ 女性学(1)では、ナプキンの実験及び製作をオンラインで行ったことから、個々の学生の実験結果及び製作物の比較・検討・相互評価ができなかった。

5 今後の目標(これからどうするか)

ほぼすべての科目において、的確かつ安全にICTを活用できるよう指導する。また、事前・事後の学習課題を設定するとともに、オンラインによる学生への個別指導を行う。特に、教職論、教育原理、道徳教育の指導法では、教科書の事前学習を促し、反転学習の機会を増やしたい。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① リアクション・ペーパー(非公開)
- ② 学習指導案(非公開)
- ③ プレゼンテーション用資料(非公開)
- ④ 課題報告書(非公開)
- ⑤ 教科書 内海崎貴子編著『教職のための教育原理 第2版』八千代出版、2019年
- ⑥ 教科書 内海崎貴子編著『教職のための道徳教育』八千代出版、2017年
- ⑦ 教科書 山崎準二・矢野博之編著『新・教職概論 改訂版』学文社、2020年
- ⑧ 教科書 内海崎貴子編著『新・教職のための教職原理』八千代出版 2021年2月刊行予定

ティーチング・ポートフォリオ

加藤 美由紀

(記入日：2020年9月23日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

理科（1年前期選択必修科目2単位）、理科教育法（2年後期選択必修科目2単位）、教職専門演習（4）（年後期選択科目2単位）、児童教育基礎演習（2年後期必修2単位）、児童教育演習（3年通年必修4単位）、教職教養演習（2）（3年前期選択必修科目2単位）、メディアリテラシー教育（3年前期選択科目2単位）、情報リテラシー（共通教育必修2単位）、生命の科学（1）（2）（共通教育各2単位）、人体の科学（1）（2）（共通教育各2単位）など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

小学校の教員となるために必要な理科に関する資質・能力を身につけ、また、現代の教育課題に対して、各自の考えを整理することを目標としている。

また、情報や科学技術などの私たちの身の回りの事象について、ある程度考えることができる姿勢を身につけることを目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

理科については、小学校での学習内容に加え、教員採用試験に出題される範囲の理科に関する概念を習得するために、パワーポイント資料での説明、実験の動画を視聴後、考察する課題を提出することで、科学的思考力の育成を行った。また、各自作製した振り子を用いて実験後、作成したレポートを添削解説することで科学的思考力の育成に努めた。各回に関連する内容の教員採用試験の過去問題を事後学修とした。理科教育法については、学生一人一人が実験・実習の模擬授業を行うことで、実験・実習に対する準備、児童への実験方法の指示の方法を習得するよう支援を行った。メディアリテラシー教育は、小学生が本、写真等を扱う上での著作権、インターネットやスマートフォンを利用する際のモラル、プログラミング（メッシュ、スクラッチ、マイクロビット）について扱い、学生が学習指導案を作成する方法とした。情報リテラシーについては、PCを扱う基礎的な内容に加え、webページの検索の仕方、引用する際の留意事項等、各回の課題について添削を行い、習得を促した。生命の科学・人体の科学においては、生物学に関する科学的知識の確認後、ゲノム編集や、臓器移植、iPS細胞などの科学技術の適用についての課題、ヘルスリテラシーについての文献を紹介し、日常

生活の中での科学ということに関しての学修を促した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

理科については、毎時間課題を提出させる中で、探究のプロセスに沿ったレポートを作成できる姿勢を身につけた（エビデンス 3）。理科教育法については、複数班分の実験の準備、安全指導、実験方法、結果、考察、後片付けの指導についての流れを学生が習得した。また、理科の各学年の学習内容の構成を確認し、理科の見方・考え方を考慮に入れて学習指導案を作成する姿勢を身につけた（エビデンス 4）。教職教養演習（2）は、現代の教育課題について現状と課題を分析する中で、現代の教育課題についてある程度把握し、教員採用試験の面接や小論文に向けての題材を収集した（エビデンス 3,4）。

情報リテラシー、メディアリテラシー教育については、著作権やネットリテラシーについて関心を喚起した（エビデンス 3,4）。

生命の科学・人体の科学については、日常生活で目にする生命科学・人体の科学に関する問題について関心を持つ姿勢を身につけた学生もみられたが、これらの科学的知識について苦手意識を持つ学生も見られた（エビデンス 3,4）。

5 今後の目標（これからどうするか）

理科については、実験・実習及びレポート作成による概念の習得を継続するとともに、理科におけるプログラミング的思考や ICT の活用について学生が習得する機会を充実させる。生命の科学、人体の科学については、日常生活の中での科学技術に関する内容を充実させるよう工夫を行う。情報リテラシーについては、情報を扱う上でのリテラシー、モラルについて、学生が調べ考察する支援を引き続き行いたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. シラバス（公開）
2. パワーポイント資料（非公開）
3. 提出課題（非公開）
4. 提出レポート（非公開）

(記入日：2020年9月30日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

国語（1年次 通年 専門教育科目 選択必修 4単位）、国語科教育法（2年次 前期 教職に関する科目 2単位）、国語科教育法Ⅰ（3年次 前期 教職に関する科目 2単位）、国語科教育法Ⅱ（3年次 後期 教職に関する科目、2単位）、児童教育演習（3年次 通年 専門教育科目 必修 2単位）、教職専門演習（1）（3年次 後期 専門教育科目 選択必修 2単位）、教育実習演習（事前・事後指導）（3年次 通年 専門教育科目 選択必修 1単位）など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

児童教育学科は、小学校教員の養成を主たる目的としている。その目的を受け私の教育理念・目標は、講義を通して、小学校教員が持つべき知識や技能を学生が身につけることである。さらに、小学校教員が備えておくべき資質や情意面を育成することである。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

(1) 「国語」(1年次 通年)

コロナ禍の影響があり、1年次の「国語」は、前期ではオンラインでの双方向型の授業を行った。国語科の内容と構造の理解を深めるために、授業の前半は講義形式が中心であった。学生の理解の定着を図るために、毎時間授業時間外に取り組む課題を課した。また、学生の意欲が低下しないよう課題に対するフィードバックをきめ細かにを行い、取り組む姿勢や課題の内容を具体的に讃えるように努めた。

また、授業の後半は、主に演習形式が中心であった。TEAMSのアプリケーションを活用し、オンライン上でグループに分かれ課題に取り組んでいた。前半の講義形式の内容を活用し課題が解決できるよう、講義と演習の内容を常に吟味した。

後期の「国語」の授業では、指導者による模擬授業を実施し、学生は児童役にまわっていただく予定である。そして授業の後半では、その模擬授業をめぐるリフレクションを行い、児童の学習活動を支える教師の支援や援助等の実際を学んでいく。さらに、児童役として模擬授業に参加することで実感

するであろう学習者の安心感を喚起する教師の働きかけ（表情や頷き）についての理解も深めていく。

通年でこのような授業を繰り返すことで、小学校教員が持つべき知識や技能と、備えておくべき資質や情意面の素地を培っていく。

（2）「国語科教育法Ⅰ」（3年次 前期）

前期3年次の「国語科教育法Ⅰ」の授業もコロナ禍の影響があり、オンラインでの双方向型の授業を行った。国語科の内容と構造の理解を深め、学習材の分析と授業デザインの理論と方法を理解した。

授業の前半は講義形式が中心であった。学生の理解の定着を図るために、毎時間授業時間外に取り組む課題を課した。また、学生の意欲が低下しないよう課題に対するフィードバックをきめ細かに行い、取り組む姿勢や課題の内容を具体的に讃えるように努めた。

また、授業の後半は、主に演習形式が中心であった。TEAMSのアプリケーションを活用し、オンライン上でグループに分かれ課題に取り組んでいた。前半の講義形式の内容を活用し課題が解決できるよう、講義と演習の内容を常に吟味した。

後期は「国語科教育法Ⅱ」の授業へと引き継がれていく。学生一人一人が模擬授業を行うことで、前期「国語科教育法Ⅰ」で学んだ学習材の分析と授業デザインの理論や方法の定着を図っていく。また模擬授業の中で、児童役としても参加することで、学習者の安心感を喚起する教師の働きかけ（表情や頷き）についての理解も深めていく。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

1年次の「国語」においては、国語科の内容と構造に対する理解の定着が見られた。また、授業時間外に学修の時間を設けていることが確認できた（エビデンス1・2）。

また、3年次の「国語科教育法Ⅰ」では、学習材の分析と授業デザインの理論と方法に対する理解の定着が見られた（エビデンス1・2）。また、授業時間外に課題である指導案作成のため「チャット」や「オンライン会議」を通して助言を求める学生が60%以上いた（エビデンス3）。

以上、学生の切実さや必要感等が喚起される場面では、授業時間外でも学修する姿が確認できた。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生の切実さや必要感が喚起される場面では、授業時間外でも学修する学生の姿が確認できた。

学生が自ら取り組みたいと思える情報（教員の採用状況や、教育現場での課題、文献の収集方法等）を今後も提示し、授業時間外での学修の機会を今後も設けていく。

また、1年次の後期の「国語」においては、授業時間外に課題を製作する機会が多い。児童の立場になり製作することで、必要な指導事項が明らかになってくる。こうした経験を価値づけることにより、授業時間外に進んで学修する習慣を身につけさせていく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- （1）リアクションペーパー（非公開）
- （2）学生の製作物（課題、指導案等）（非公開）
- （3）オンライン会議・情報共有アプリケーションソフト「TEAMS」（Microsoft）の記録